様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５１２

研究課題名（和文）大正期の外来語受容―100年前の“グローバリゼーション”という観点から―

研究課題名（英文）Acceptance of words of foreign origin in the Taisho period: from the viewpoint of "the globalization" of 100 years ago

研究代表者
高崎　みどり（TAKASAKI, Midori）

お茶の水女子大学・その他・理事・副学長

研究者番号：６００９６２３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近代語史の中でも、従来研究が少なく、〝エアポケット〟のようになっていると思われる大正期の外来語について、その実態と近代語史における位置づけを明らかにすることである。研究の結果、戦後に次いで2番目に外来語が急増したと言われる大正期の外来語の日本語における定着の状況と、男女による使用傾向の違いについて、新たな可能性を示すことができた。なお、分析観点は、固有名詞、一般名詞、翻訳との関連性、抽象度の高い語、広告など多岐に亘っている。研究成果は、書籍として平成28年度末に刊行予定である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is: to describe the actual situation of the words of foreign origin of the Taisho period; and to clarify their positioning in the history of the modern Japanese language. The Taisho period is said to have had the second augmented number of the words of foreign origin next to the postwar. This study analyses the subject that is considered like an air pocket of studies. As the results of the study, the findings were shown as follows: the words of foreign origin of the Taisho period became generally incorporated into the Japanese language; and men and women possibly used the words of foreign origin of the Taisho period in different ways. Analyses were made from various points of view: proper noun, general noun, relevance with translation, words with highly abstract meanings, advertisement, and the like. The findings of the study will be published as a book at the end of the 2016 academic year.

研究分野：日本語学

キーワード：言語生活　日本語史　表記　文体　語彙　意味

１．研究開始当初の背景

外来語は大正期になると、明治期と比べて気取った語から日常語となり、その表記は漢字からカタカナへと変わったといわれている。大正期は外来語研究が行われるようになり、外来語辞典が発行され始めた重要な時期でもある。

しかし、従来の研究の中心は、明治期や昭和期であり、大正期を改めて取り上げた研究はこれまでなかった。近代から現代までを対象とした大規模な研究においても、数年おきの抽出調査では、大正期に関するデータを十分に得ることはできない。また、これまで調査対象とされてきたのは主に普通名詞であり、大正期の外来語の実態をつかむことは難しかった。

２．研究の目的

研究の目的は、大正期における外来語を、語彙論・表記論・文体論の観点から分析し、その実態を明らかにすることであり、また、それによって近代外来語史における位置づけを提示することである。

以上の目的を達成するために、本研究では、通時的な縦のラインに加えて、雑誌の読者層の違いを意識した横のラインを設定した。以下、具体的な研究目的を示す。

(1)一般総合雑誌『中央公論』と『婦人公論』における外来語の使用状況を探り、通時的な変化を追う。

(2)外来語の表記や、外来語を含む混種語の出現状況から、日本語における定着を示す。

(3)男性向け雑誌と女性向け雑誌のジェンダーギャップが外来語の使用に与える影響を示す。

３．研究の方法

資料には、中央公論社（現中央公論新社）から発行されている『中央公論』と『婦人公論』を用いた。対象号は『婦人公論』の創刊年である大正 5 年から大正 16 年までの 1 月号（計 24 号分）であり、その中の公論部分と広告部分を対象とした（大正 16 年は昭和 2 年にあたるが、雑誌の表記を尊重した）。

分析に際し必要な研究資料や参考文献の収集、そしてデータベースの構築においては、研究協力者やお茶の水女子大学学部学生・大学院生および卒業生の協力を得て、随時追加を行った。

個別の研究を進める過程では、定期的な研究会を開催し、個々の研究の深化を行った。それぞれの研究成果を持ち寄り、本研究の成果を確認した。随時、学会や研究会等で発表・投稿し、その機会に得た意見・批評を共有・討議した。

また、多角的な視点からデータベースを何度も見直し、掲載項目の充実や分類方法の改善を図った。

４．研究成果

本研究の成果は、書籍として出版予定である。以下、目次に沿って、各分担者の研究概要を示す。また、データベースも広く利用できるよう公開予定である。

(1)共通データの提示（研究分担者：中里理子、研究協力者：石井久美子）

本研究で『中央公論』と『婦人公論』の外来語に関するデータベースを構築したが、それをもとにした、研究者全員に共通する数量的データである。具体的には、固有名詞と一般名詞に分け、年ごとの数値を明示する。これによって大正期における通時的な変化を追うことができる。

(2)固有名詞の表記（研究協力者：石井久美子）

固有名詞について、これまでの研究では取り上げられてこなかった「英」（イギリスのこと）といった略称や、「支那」といったアジアの地名も含めて抽出し、分析考察を行っている。

その結果、『中央公論』と『婦人公論』では取り上げられている記事の違いから、出現回数上位の地名に違いが見られた。

表記については、『中央公論』はルビや併記のない漢字のみの表記、『婦人公論』ではカタカナのみ表記が優勢であることが特徴的である。また、先行研究でも指摘されていた漢字からカタカナへという表記の変化が『中央公論』と『婦人公論』でも確認された。

さらに、外来語を含む混種語も取り上げることによって、その外国語の日本語における定着も示している。

(3)一般名詞の比較（研究分担者：中里理子）

『中央公論』と『婦人公論』の外来語を、読者層の違い（男性向けと女性向け）という観点から比較している。

大きな違いは、延べ語数、一般語の文や、和語・漢語のカタカナ表記にあると指摘する。

①延べ語数は、『中央公論』に頻度の多い外来語が見られたが（ブルジョア、プロレタリア、デモクラシーなど）、記事の性質によるものであると考えられる。

②一般語の分野に関しては、『婦人公論』では家庭用品、衣類などの具体物が多いのに対し、『中央公論』はプロセス、メリットなど、汎用性のある抽象的な外来語も多く用いられている。

③『婦人公論』において男性の筆者が外来語を好んで使用する傾向にある。

二誌における普通名詞のカタカナ語の違いを年ごとに追い、両雑誌の違いを指摘している。また、両雑誌に見る一般語が大正期にどのように使われていたかを、青空文庫などの調査を加えて、年代別の移り変わりを示し

ている。

(4)翻訳型の外来語（研究分担者：立川和美）
『中央公論』と『婦人公論』の広告部分における翻訳型外来語の傾向を探り、商品名に翻訳漢語が用いられていることを指摘している。
『婦人公論』公論部分における翻訳型外来語については、やや増加傾向が見られる。その種類としては、漢語とカタカナ語が完全にイコールでない例、専門性が高いもの、外来語を使うために漢語を当てている例を挙げている。意味では、分類語彙表の「1.4 生産物及び用具」が多くなっている。
翻訳型外来語を用いることについて、漢字を通して意味が読み手に類推されるにもかかわらず、カタカナで外来語の発音ルビを振ることで、書き手が読み手と同様の知的領域を共有していることを確認していると分析する。
『中央公論』公論部分における翻訳型外来語については、大正期中期から後期に向けて増加傾向が見られるとする。『婦人公論』より『中央公論』の方が、圧倒的に翻訳型外来語が多くなっている。
外来語の増加は叙述内容が外来の事物に基づいていることを読者に意識させることになる。記事のテーマによってその様相は大きく異なるが、政治経済にかかわる語が増加しており、書き手は意図的に高度に専門的な用語を臨時的に翻訳するということを行っているということを明らかにした。

(5)「という」マーカーから見た外来語（研究分担者：星野祐子）
『中央公論』と『婦人公論』の啓蒙的な記事や時事を扱う記事を取り上げ、抽象度の高い外来語の使用実態やテクスト中での外来語のふるまいを調査している。
抽象度の高い外来語が用いられる背景について、キーワードとなる場合、意味の限定に機能する場合、特別なニュアンスの伝達を意図する場合を指摘した。
また、読み手に理解させる工夫としては、語釈を付すこと、比較を用いて説明すること、タイトルと照らし合わせること、周辺文脈に換言されていることを挙げている。

(6) 『婦人公論』に掲載された広告に見える外来語（研究分担者：染谷裕子）
大正期の『婦人公論』の広告（除く本文内の小広告）の中に見える外来語の「語彙」および「表記」について、その特徴を探っている。固有名詞（国名、会社名、人名、書名、曲名、商品名等）および普通名詞として見える外来語は、（初期の頃）若干の漢字表記が混ざるものの、主に片仮名表記によって記され、大正末年をピークにその用例も年次を追うごとに増加傾向にある。語彙面では普通名詞においては抽象的な語はほとんど見えず多くが物品名であるという特徴、表記面においてはローマ字表記が装飾的な意味も含めて年次を追うごとに目立つという特徴がみられる。これらの特徴が、『婦人公論』の同時期の本文における外来語と、さらに同時期の『中央公論』の広告に用いられる外来語とどう異なるのか、データの比較を行いつつ、広告としての、女性読者対象としてのこの時期の外来語使用の特徴を明らかにしている。また、女性読者対象の雑誌ではあるが読者層の異なると思われる『主婦の友』の同時期の資料を採集し、外来語使用の比較を行うことによって、『婦人公論』の「広告」における特徴を捉え、それが何を意味するのかについて考えている。

(7)大正期の外来語の定着度―現代語からみた（研究代表者：高崎みどり）
定着度判定の一環として、現代語テクスト、現代語辞典の中の様相を調査している。
『中央公論』の公論部分の外来語のうち、カタカナ表記の普通名詞を対象とし、下記の3点を調査している。
・文藝春秋の巻頭随筆500編の中に出現するかどうか
・現代語の国語辞典の中に出てくるかどうか
・『女性のことば・男性のことば職場編』に出てくるかどうか
その結果、大正期の『中央公論』のカタカナ外来語のうち、半数近くが現代語にも何らかの形で定着しているということが明らかになった。
意味・用法の違いへの注目、使われなくなった語における両用表記の漢字語にも注目し分析を行っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
(1)立川和美（2016）「中上級の中国人日本語学習者に向けた文学テクストの読解を用いる外来語習得の試み ： 夏目漱石『こころ』を活用して」『通経済大学社会学部論叢』26(2)，61-85（査読無）

(2)石井久美子（2015）「大正時代の外来語―固有名詞混種語を中心として―」お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター『比較日本学教育研究センター研究年報』第 11 号，251-256（査読無）

(3)石井久美子（2014）「『仮名読新聞』の外来語の表記」『国語文字史の研究』十四，和泉書院，171-185,（査読有）

(4)石井久美子（2014）「大正期雑誌の書き手・読み手の位相差と外来語の使用実態」表

現学会『表現研究』第 99 号，20-29（査読有）

(5)石井久美子（2014）「大正期の『中央公論』『婦人公論』における外来語表記の特徴」お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科『人間文化創成科学論叢』第 16 巻，1-9（査読有）
http://hdl.handle.net/10083/55026

〔学会発表〕（計 3 件）
(1)星野祐子「大正期における外来語の受容―抽象度の高い外来語の使用に注目して―」お茶の水女子大学国語国文学会大会，2015 年 12 月 2 日，お茶の水女子大学（東京都）

(2)石井久美子「大正時代の外来語―固有名詞を中心として―」第 9 回国際日本学コンソーシアム，2014 年 12 月 16 日，お茶の水女子大学（東京都）

(3)石井久美子「『仮名読新聞』の表記」第 26 回表記研究会研究発表会，2013 年 6 月 1 日，大阪大学豊中キャンパス（大阪府）

６．研究組織
(1)研究代表者
高崎　みどり（TAKASAKI MIDORI）
お茶の水女子大学・理事・副学長
研究者番号：60096237

(2)研究分担者
染谷　裕子（SOMEYA YUUKO）
田園調布学園大学・子ども未来学部・教授
研究者番号：259178

中里　理子（NAKAZATO MICHIKO）
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号：90313577

立川　和美（TACHIKAWA KAZUMI）
流通経済大学・社会学部・教授
研究者番号：70418888

星野　祐子（HOSHINO　YUKO）
十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授
研究者番号：70564110

(3)研究協力者
石井　久美子（ISHII KUMIKO）
お茶の水女子大学・基幹研究院・助教
研究者番号：60774990